

1

1964年、感動を胸に

陸上部顧問の先生が、東京五輪の観戦に国立競技場まで連れて行ってくれたときに、自分が見つないだ聖火はここに来たのだということを知って、感動したのを覚えています。そして、「この競技場で自分も走ってみたい」という気持ちにさせられました。

その後、国内の陸上競技大会で、国立競技場を走る機会に恵まれ、中学3年生のときには、全国3位（陸上男子800m）の成績を収めるまでになりました。

2

1964年東京五輪で変わったこと

私が聖火ランナーをやったのは中学1年生だったので、聖火ランナーとして走りたかった先輩に申し訳ないという気持ちがあり、辛かった思い出があります。

この経験は、自分が人の上に立つようになったとき、役立ちました。若い人をどのように支えてあげればよいかを考えられるようになったからです。例えば、「競技をやめたい」と思っている人がいるときは、簡単にやめさせるのではなく、その人の気持ちに寄り添って、よい方法を考えています。

東京五輪 50年前と6年後

人とのめぐりあい、人生のタイミング

1964年東京五輪当時のこととお聞きしていると、節々で「私は人に恵まれていた」と他者への尊敬の念を表す露木さん。東京五輪からは、どのような影響を受けたのでしょうか。そして、今後に期待することは。

3

今は若い人の成長を見ているのが楽しい

五輪に出られるチャンスは、スポーツをやっている人に平等にあります。実際に、選手として出場できる人は一握りですが、それをめざすという夢をもつことはすばらしいと思います。大きな希望を抱いている子どもたちを応援したい。少しのことでもくじけないで、はい上がってほしいです。開成町から、五輪・パラリンピック選手が、出るといいなあ。これからがとても楽しみです。町内には、能力のあるすばらしい選手がいるので、これからの活躍に期待したいです。

4

スポーツのまち かいせい

スポーツ競技をやるには、みんなの力がまとまることが大切。選手や選手を支えるスタッフ、地域の人たちなど、多くの方々の協力が必要です。開成町体育協会は、理事の方々との連絡が密にできていて、会員のまとまりがあります。それが、昨年度の第67回足柄上一周駅伝で、開成町チーム初優勝という結果に表れたのだと思います。また、昨年12月に開催した町内駅伝大会も、皆さんの協力のもと、とてもよい大会になりました。開成町は、スポーツ振興に熱心です。これが、2020年東京五輪につながってほしいと思います。



当時の様子（昭和39年広報かいせい）



1964年東京五輪の記念硬貨
表面には東京五輪の文字、裏面には富士山の絵（露木さん私物）

まちづくり情報特派員特集 元聖火ランナーに聞いた 東京五輪の思い出

6年後の2020年東京五輪に向けて想いを巡らしている方も多いと思います。1964年東京五輪で、聖火ランナーを務めた町体育協会会長の露木重雄さん（牛島）もその一人。当時の思い出と6年後に向けての想いを聞きました。

自治活動応援課 ☎84-0315

中学1年生の聖火ランナー
小学校6年生のマラソン大会で、2位に入賞したことをきっかけに、陸上競技を始めました。中学校で陸上部に入り、そのときに聖火ランナーを任されました。足柄上地区で約20人の生徒が聖火ランナーに選ばれていたと思います。走ったのは、箱根の小平台からの下りを1.2〜1.3秒だったと思います。走っているときは、五輪の聖火を持って走っているという意識はあまりありませんでした。数週間後に、顧

問の先生に国立競技場に連れて行ってもらって、そこで初めて、日本でオリンピックが開催されていることを実感しました。当時は、テレビを持っている家庭が少なかったです。メディアも今ほど発達していなかったもので、分らないことも多かったかもしれません。

スポーツのできる環境
当時、中学校で部活動に入っている生徒は半数くらいでした。あとの半数は、いわゆる

る帰宅部でした。農繁期などは、家の手伝いで忙しい生徒も少なくありませんでした。そのような中、私はスポーツをやらせてもらっていたので、親には感謝しています。当時は、ユニフォームを買うのも大変な時代でしたから、マラソン用の水色のタイツを買ってもらったときはうれしかったのを覚えています。

今は、スポーツをする環境が随分整っています。若い人には、ぜひがんばってもらって、五輪で活躍できるような選手になってほしいです。

露木重雄さん
町体育協会会長。
当協会の運営に長年
携わり、後進の教育
に尽力されている。
専門は陸上競技。

